

日清戦争後の〈遊学少年〉たち

——雑誌「少年世界」を手がかりに——

〈一〉

一八九五（明治28）年一月、明治期を代表する大出版社に成長しつつあった博文館は、「幼年雑誌」「日本之少年」「学生筆戦場」等の諸雑誌を整理、統合して雑誌「少年世界」を創刊した。主筆には当時、京都で新聞社の小説記者をつとめ、「こがね丸」での成功以来、少年文学の作家としても著名であった巖谷小波が招かれ、ほどなく同誌は、「少年園」や「小国民」等の競争誌を凌駕して、少年雑誌の王座に君臨することになる。

創刊号の論説「明治廿八年を迎ふ」（無署名）、「少年世界」第一巻第一号、一八九五年一月一日、三〜四頁——以下、本文中では「少年世界」の誌名を省略、巻号および発行年月日は一一一、九五年一月一日のように略記）は、当時の社会状況を踏まえながら、少年たちに次のように呼びかけている。

酒 井 晶 代

試に思へ、昨年の一月一日に未だ読能はざりし書の、今年一月一日に、之を読み得るに至りしもの幾許ぞ。昨年の一月一日に未だ解する能はざりし語の、今年の一月一日に、之を解し得るに至りしもの幾許ぞ。況んや昨年の今月今日には、未だ夢にだも想はざりし征清の盛拳は、今や着々其歩を進めて、海には黄海に旅順に、陸には平壤に金州に、捷報快信は頻々として、吾人の鼓膜を打來るをや。

学びを通した少年たちの進歩・成長と、日清戦争による国力拡張とが重ねられていることに注意したい。筆者はさらに続けて、新しい年を「勇名轟然東洋の一大強国として、世界列国に歓迎せらるゝの大希望を前にし」た時とし、少年たちの立場を「今や将さに世界の新舞台に立たんと」する「此の名譽ある新強国の小国民」と表現して、「名譽大なれば、責任亦重し」と、奮発と覚悟を求めている。

続橋達雄は、明治期の幼少年雑誌の変容を検討するなかで、同誌の登場を〈創始期〉から〈展開期〉への「重要な接点」に位置付けてい

る。⁽¹⁾また、菅忠道も同様に、〈創生期〉に対して、〈発展期〉の児童雑誌であると評価する。⁽²⁾「少年世界」は、日清戦争を契機とした資本主義の急速な発展のなかで登場し、戦勝を背景とした「東洋の一大強国」意識のもと、国内のみならず、諸外国Ⅱ「世界」への広い視野を養い、かつ、立身出世を志す少年たちの集う場所Ⅱ「世界」として成立、展開していくことになったと言えよう。

近代的な国家体制がほぼ整備され、対外戦争への勝利を機に新たな「期待感」⁽³⁾が生まれつつあったこの時期、送り手たちは、雑誌というメディアを介して、少年読者たちに何を示し、どのようなメッセージを託そうと試みたのだろうか。彼らの願望や、社会的な要請を如何に受けとめ、加工、再生産を施して、雑誌という小宇宙のなかに構成し、といったのであろうか。本稿では、上京遊学という題材に着眼し、小説作品を中心に、口絵や記事、投稿作文にも目配りしながらその特質を整理する試みを通して、少年たちに提示された立身出世の夢と、その変容のありさまを考察していきたい。

〈一〉

今回、検討対象としたのは、一八九五（明治28）年一月一日「少年世界」創刊号から、九九（同32）年一月一日発行の第五卷第二六号まで五年間の計一二七冊⁽⁴⁾であり、正確には日清戦争下から戦後までということになる。この間に同誌に発表された小説形式の上京遊学をめぐる物語は、登場人物と東京とのあいだに横たわる距離に着眼すると、次の三つに分類することができる。

まず第一は、上京の志を抱きながら、遊学を果たすことができない少年たちの物語である。例えば、「落花一片」（連山人関、湖山人作／一八一―一九、九五年九月一日―〇月一日／小説）は、「私」（雪野淡月）が、旅先で出会った桜木芳三という少年の経歴を聞く、という形式で進行する。桜木は、小学校卒業の際、遠方から来た中学校長に「せめて尋常中学だけは経置かでは、後に悔ひなむ時の来るべし。あらず、常に果敢なき境界に沈淪して、到底頭の上がる時なかるべし」強ひてにても父母に願ひ入れ、早く入学の運びに及ばれよかし」と、個別に進学の必要を説かれるほど優秀な少年であった。しかし、家が貧しいために進学がかなわず、不本意なままに父親の勧めで郡役所の給仕となる。一時は進学した友人たちに隠れるように仕事をし、わが身の不幸を呪って死さえ考える日々を過ごす。しかし、「東洋立志編」という書物との出会いを機に「昨來の非」を悟り、独学しながら上京の資金を蓄えるべく無理を重ねたあげく、「肺病」に冒されてしまう。「不平苦悶の胸に堪へ兼ねて」「好める詩集懐に」「近郡漫遊」の途上にある雪野と、「東洋立志編」を傍らに、「名を成すの要は、外、物にあらすして、内、心にあり。刻苦して勉めば、何ならざる事のあるべきぞ」と自らを励ましながら独習する桜木との境遇の違いは歴然としている。作品に描かれるのは、如何に学資を手に入れ、学問を身につけるか、という積極的な生き方ではない。タイトルの「落花」が、苦学の末、命を奪われていく桜木の姿を象徴しているように、厳しい境遇に耐え、ついには死に至る悲劇的な生き方が、情景描写を織り込

みながら抒情的に語られていく。

「奉公」(森本石童／三一―一九、九七年九月一日／目次では「小説」、本文では「教訓談」)や「銀行の小童」(磯萍水／四―二七、九八年一月二日―五日／「小話」)とともに、遊学を諦めて仕事に就いた少年の物語である。「奉公」は、父親亡き後、経済的な事情から遊学がかなわない少年が、叔父の紹介で米穀会社の丁稚となり、次第に仕事ぶりが認められて出世していく話で、学問の世界ではなく、実業の世界に活路を見出していく少年の姿が描かれている。「銀行の小童」は、兄弟のように仲良しだった二人の少年のうち、国野という少年は東京に出て、海軍士官になるべく上級学校へ進学するが、弟のように可愛がっていたもうひとりの少年・佐々木静男は、家庭の事情で小学校を去り、夜学に通いながら銀行で小僧をすることになる。思いがけず佐々木に再会した国野は、「自分の思ふ事は思ふ通りにならない世の中ですね」と「悟道の言葉」を口にし、「勇気が沈むで老人くさくなつて、奮発力に乏しくなつて」別人のように変わり果ててしまった佐々木の姿にショックを受ける。

「奉公」を除く二作では、前途有望であるにもかかわらず、家庭の経済的な事情から進学を諦め、仕事の傍ら、苦学を強いられる少年たちを取りあげている。物語の語り手としては、「落花一片」の雪野、「銀行の小童」の国野のように順当に進学を果たした少年が選ばれており、彼らの優越感から逆照射された、友人への感傷的な同情が作品全体の基調になっていると言えよう。

第二は、遊学先までの旅を描いた物語である。「木賃宿」(江見水蔭／三一―一三、九七年一月一日―二月一日／「立志小説」)や「逆旅」(新田静湾／五―一九―二三まで確認、九九年九月一日―十一月一日／「立志小説」*未完)がこれに該当する。「木賃宿」は、母一人子一人の貧しい家の少年、一六歳の「我」(片瀬松太郎)が、「これで成す事もなく一生を過したなら、家を興し、父の名を揚げ、身を立て、国のために尽す事などは逆も出来ぬ」「如何かして出世したいものだ」と一念発起し、「僅か一円余りの旅費」を手に、知人を頼って越後から東京に向かう。途中、同道した旅人に誘われるままに計画を変更して上等の旅館に宿泊したり、宿の洋燈を壊してしまい弁償を迫られたりしながら、小心で見栄っぱり少年が、様々なトラブルを乗り越えるなかで、逞しくしたたかに成長していく過程が旅の行程と並行して語られていく。東京市街に差しかかった所で、物語は完結している。

経済的に決して恵まれていたとは言えない主人公の旅は、これから始まるうとしている東京での厳しい生活のアナロジイになっているように思われる。持ち物を売ったり、知人に融通してもらったりして金を工面しながら、主人公が宿泊する木賃宿は、「汚なく、狭く、古く、柱の曲り、壁の破れ、根座板の抜けて、そして畳の穴の明いて居」る場所、「汚ない／＼、餓鬼の様な連中」が集う所と描写される。また、外套を狙う「如何にも相の悪い」「宿帳を記ける役目の」男は、「相応の教育を受けた者、可成りの財産も有つた者、それが或る失望から酒色に耽つて、加へて花合戦にうつゝ、を抜かして」落伍者になったと記される。世の中の底辺に生きる人々がうごめく木賃宿の様子を通して、

華やかな文明の影にかくされた、社会の裏面が明らかにされていく。

「逆旅」も同じく、「政治家に成りたいといふの念」を抱く一六歳の「我」（川嶋巖）が、親友の山谷豪三を伴って、家出同然に松江を出発し、東京へと向かう物語である。初めて泊る旅宿での五右衛門風呂への驚き、旅費を盗まれる事件、野宿、恩師との再会、大坂や神戸での就労などを盛り込みながら、二少年は東京を目指すが、上京の好機をつかんだ所で、未完に終わっている。

第三には、上京先で孤独を味わい、望郷の念を募らせる少年たちの物語が挙げられる。「我が母」（思椀坊補、石童坊作／一一七、九五年九月一日／小説）では、信二という少年の視点から、故郷での幼年時代が回想される。代々紀州藩の家老をつとめてきた家の次男坊である彼は、母親と兄、祖父の代からの家来である吾助という老人と暮らしていた。在京の父親には別に妻（妾）と娘がおり、信二が七、八歳の頃、兄は父に伴われて上京していく。休暇に帰省した兄の「東京には立派な——大きな家が沢山列んで居ることやら、夜になると電気灯といふものがあつて、昼よりも明るいことやら、上野の動物園には虎や熊などが飼つてあることやら」との土産話、義妹・花子の語る「此処の母様より溫和しい——そして種々なものを呉れるい、母様」の事などを聞いた信二は、東京への夢をふくらませる。ところが、休暇の後、兄はそのまま東京に戻ることもなく、西京へ向かう。こうした兄の行動や、母親や吾助の涙の背後に、東京生活の辛さがほのめかされるが、幼い信二にはそれが理解できない。そして、一二歳の年、信二も、

父の命でいよいよ上京することになる。しかし、「母上の表面は優しく、裏面に邪毒のある事、花子の愛らしきも母の性を受けて、心は意地悪き事、生計は贅沢だが、其割に資産のない事」など、ほどなく憧れていた都会の暮らしが偽善に満ちたものであることを知り、愕然とする。「東京が嫌」で堪らない信二にできるのは、「雨のそぼ降る夕」に「故郷の空を眺めては、独り」で涙することのみである。

以上のような上京遊学をめぐる作品を概観した時、二〇年代初頭、先行誌である「少年園」「小国民」などに掲載された同種の作品と比べて、遊学がより実現困難なものとして描き出されていることに気付く⁽⁵⁾。ほどなく手痛い敗北が待っているにしろ、曲がりなりにも東京に行き着くことができたかつての少年たちの物語では、上京先での困難や挫折に多くの頁が割かれていた。しかし「落花一片」以下、ここに描かれた少年たちは、遊学したくてもできない。もしくは「木賃箱」や「逆旅」のように上京の途中で様々なトラブルに遭遇し、中途での断念も含めて、物語の大半は東京に到着するまでに完結してしまうのである。

〈三〉

目的地で如何に過ごすべきかを語る作品（「少年園」「小国民」）から、目的地まで如何にたどり着くかを描く作品（「少年世界」）へ——、以上のような変容の背後から、どのような主題が浮かびあがってくるだろうか。

東京までの社会的距離に着眼すると、そこから析出してくる主題のひとつは、〈苦学〉であろう。「東洋立志編」を手に「今、世に名あるの人、悉く中学大学を終へたるものに限れるか、あらずあらず、大にあらず、必しも然く限らざるなり」「勉め励め！飽くまで励め！」「刻苦して勉めば、何ならざる事のあるべきぞ」と自らを奮い立たせながら、上京の旅費を蓄える「落花一片」の桜木や、銀行に奉公しながら夜学に通う「銀行の小童」の佐々木は、文字通り苦学する少年と言える。「木賃宿」の片瀬もまた、雪の中で路頭に迷いながらも「情けない事であるけれども後の立身の下ごしらえ、東京へ出てからの苦学に競べれば、何んでもない事だ」と自らに言い聞かせながら旅を続ける。社会的な、とりわけ経済的な障害は、少年たちの夢の実現を阻むものとして、様々な形で作品のなかに登場する。そして、彼らは一様に、「刻苦」という言葉が象徴するような精神的な力によって、社会的な圧力に抗しようとするのである。

同様の傾向は、小説以外の記事にも共通していた。例えば「東京遊学」（天海生／一一一六、九五年八月一五日、五九頁／「講演」）において、筆者は「東京に遊学する以前に於て先づ確固不拔の精神を持し、一定して撼かざる目的を定むる」ことを「地方の少年学生たる者」たちに課している。「目的」に先行して、「精神」が強調される点に注意したい。一方、記事と肖像写真を組み合わせて、各分野の博士を紹介する連載「日本博士鑑」の「其十」（二二二三、九七年一月一日）には、「理学博士菊池大麓君」と「医学博士佐々木政吉君」が取りあげられている。佐々木の経歴は「雪窓螢燈、苦学辛攻、終に声名を海

の内外に籍甚たらしむ、素と薄志弱行者流の企及し得べき所にあらず、況むや家に担石の蓄なく、貧窶朝夕の米飯を欠く、此苦境に処して、孜孜学業に志す、豈夫れ容易の業ならむや。博士の幼時、太だ之に類す」と書き起こされ、貧しい家に生いたち、郷塾に学んで頭角を現したのち、医家の養子となって学問を修めていく様子が紹介される。「学ぶべきは氏が幼時の苦学なる哉」と締めくくられるそれは、「医学博士」として何を成したかではなく、「医学博士」に出世するまでの「苦学」の物語に他ならない。⁽⁷⁾

〈苦学〉が叫ばれる背景には、学問による立身への関心が、より広い階層へ浸透していった社会状況がある。竹内洋は、明治三〇年前後からこの言葉が盛んに用いられる現象にふれて、就学率、とりわけ高等小学校の入学者・卒業者の増加にともない、学問による立身出世をめざす少年たちに質的転換が見られることを指摘している。士族以外の貧しい階層に上京遊学熱が広がり、縁故やネットワークなしの上京が大量現象として生じた結果、量的変化とともに「庇護型」苦学から「裸一貫型」苦学への質的变化が発生したのである。⁽⁸⁾かつての遊学少年たちには、目的も定まらないまま、都会への憧れのみを動機に上京する、という物見遊山的なところが多分にあった。ところが、立身出世への階梯としての就学、その価値への承認は、裕福な豪農・豪商や旧士族層に加えて、貧しい階層にまで上京熱を広めていく。けれども、個々の作品に描かれるように、厳しい社会的条件は少年たちの夢の実現を容易には許さない。彼らに許された数少ない選択肢の一つは、自らを律しながら、苦学や独学に励むことであった。

社会的な悪条件を精神性で克服しようと試みるこの姿勢は、とりわけ投稿文⁽⁹⁾に顕著である。例えば、「友の廢学を諫むる文」(佐藤弘顕／三一―二、九七年一〇月一日、七四―七五頁)は、父親の免職によつて学資の道を絶たれ、慶応義塾を退学しようとする友への書簡、という形式で綴られる。筆者は「概ね赤貧洗ふが如く。飢寒交々至るの悲境」にあつた「碩学偉人」や「世人の尊敬する士」たちの少年時代にふれて、彼らが大名を挙げる事ができたのはそうした悲境に挫けず「堅忍不拔の精神を以て」「能く幾多の障碍を打破」り、「熱心と勉強とを以て漸々功を積」んだからだとする。そして、「東都に在て学資に窮せし書生は。嚴寒酷暑を厭はず。習学の余暇を以て。或は新聞売りとなり。或は牛乳配達夫となり。甚しきに至りては。車夫の賤業をも顧ずして之に従事し」ながら学んでいるのだとして、一時の困難に屈することを戒め、苦学の道を勧めめる。「金銀の財宝は。容易に得るの道有之候べくも。重て来らざるは少壮青年の時代に候(中略)須らく百折不撓の精神を鼓舞し。再び御就学の程。希望の至りに不堪候」のように、全体の論調は、諫めるというよりも、精神的な力で困難に立ち向かうことへの奨励にあると言えよう。

また、「過去の吾」(高山恵治／一―二、九五年一―月一日、八四―八五頁)に端を発し、以後一年あまり投稿欄を賑わせることになつた投稿群⁽¹⁰⁾には、「落花一片」からの影響が伺えて興味ぶかい。いずれも、小学校卒業の時点からの自らの経歴を振り返る形で、遊学への夢、経済的事情などによる障害と憂苦、(書物との出会いによる)新しい決意と夢の断念が順を追って述べられ、「落花一片」と類似した内容や

構成を持つ。なかには作品に直接言及して、「彼れ(引用者注・桜木芳三を指す)の境遇即ち我の境遇なり茲に於て始めて同情の友を得たり」(「我経歴を叙して高山恵治君に交を乞ふ文」岡野孫三郎／一―一、九六年一月一日、九二頁)と深い共感を示す者もあつた。作文の末尾はそれぞれ「余は姑く遊学するの念を絶ち益々家業を助け身を立て道を行ひ名を後世に揚げ以て父母を顕はし多年鞠育の厚恩に酬ひん」(「我憂苦の経歴を叙して高山岡野松本の三君に望む」今井孝三／二―二三、九六年一二月一日、九一頁)といった美辞麗句で結ばれ、具體的な苦学の方法は示されない。桜木少年が「薄運録」を書き記したのと同様、彼らも「我憂苦の経歴」を誌上で披露することによつて、遊学の断念と苦学への意気込みを自ら確かめようとしたのである。一方で、彼らは「全国少年諸君よ余が憂心を察察し今後水魚の交を結ばれんことを」と、誌上を通して志を同じくする少年たちに呼びかける。ここには、雑誌を読み、投稿に筆を染めることを通して、遊学とは異なる立身の形を地方で探ろうとする少年たちの、新しい精神共同体とも言うべきものの発生を垣間見ることができよう。広告欄では、明治三〇年頃を境に、講義録など通信教育の広告の掲載が目立つてくる。この自学自修のための新しいメディアを支えた人々の一群には、こうした少年たちの存在があつたに違いない。

東京までの心理的距離に着眼すると、(「苦学」と並んで挙げる事ができるもう一つの主題が(望郷)であろう。「少年世界」において、この主題は二つの現われ方を見せる。一つは目的地からの距離ゆえに

生じる懐郷の念であり、今一つは目的地までの距離、ないしは憧れを反転した形で表明される田舎⇨故郷への賛美である。

先の「友の廢学を諫むる文」に伺われるように、新聞配達などに活路を求めながら学問を続けようと、上京したり、上京するべく準備する少年たちは数多くいた。⁽¹²⁾ その中で、上京先で彼らを励まし、慰める存在として、故郷という場所がクローズアップされていく。例えば、先述した「我が母」では、都会の偽善的なありさまが、義母や娘たちの、うわべだけの親切や華美な暮らしぶりに、反対に、かつて過ごした故郷での日々が、母親や吾助といった田舎の純朴な人々にそれぞれ重ねて表現されていた。少年の孤独や居たたまれなさは、「故郷の空」を思つて涙することで、わずかに慰められるのである。また、「木賃宿」においても、苦学への決意に続いて、「それに付けても今頃は母様は何をしておいでだらうかと、故郷の事を思出して、ほろ／＼と泣けば涙も氷る」という主人公の感慨が綴られる。いずれも、母親の存在が心のよりどころとしての故郷のイメージと一体になっている点が興味ぶかい。

地方からの流入者⇨上京者によって、近代的な〈中央〉としての東京が成立する。同時に、地方出身者の東京での挫折もしくは違和感が、現実をこえて理想化された〈故郷〉発見をうながし、さらに〈地方〉の意味を変えていく——松村友視は明治二〇年代の近代文学に「ユーロピアとしての故郷」の登場を指摘している。⁽¹³⁾ 時間的にはやや遅れるが、「少年世界」の投稿作文においても、遊学者の立場から故郷を描く作品が散見される。但し、理想郷としての〈故郷〉発見が、東京へ

の否定や立身出世主義への懐疑に結びつく近代文学に対して、「少年世界」においては、東京への憧れや立身出世への夢は温存されていく。

「異郷に在るの感」(福垣三五／一―五、九五年三月一日、五四―五五頁)の筆者は「笈を負ふて東都に出でしより既に一周年」、「常に故郷を思はざるなし」と望郷の思いを述べる。文中、故郷は「小川」「小山」「野」「林」などの自然に見立てて記述され、「巧名の山は蒼々として高く吾が前に聳へ、立身の川は滾々として吾が後に流る」と將來の目標がそこに重ねられる。「帰省の記事」(油谷隆吉／一―二〇、九五年一〇月一―五日、八八頁)には、姫路へ遊学中の少年の、大坂方面への帰省の旅が記される。汽車への乗車などいくつかのトピックスを凌いで、旅行中の最大のクライマックスとして選ばれるのは、山頂から故郷をのぞむ場面である。「後方を見れば古郷は眼下にありて既に帰宅せるを覚え」、「目を転じて右方」を見れば、「小島は雲烟模糊の中にありて幾多の汽船小舟は木葉の如く海上に漂泊せる等の面白さ」に心ひかれる。ここには、「小島」「小舟」などと同様、故郷を小なるものとして相対化する視座が伺えよう。また、先述した母親ないしは母親的な要素を強調した例としては、「友人の放蕩を戒むる文」(鈴木孫次郎／三一―、九七年一月一日、八八頁)がある。「目的となすべき学事を怠り酒色にのみ之れ荒み貴重光陰と金銭とを消費」している友人の噂を聞き、友の母親を尋ねた様子を、筆者は次のように書き記す。「余過日尊堂に昇り御親母様を訪ひ君が試験の御不成績を御慰め申上候処御親様急に両眼より涙を垂れ声をふるわし君の不良心を恨まれたり余も亦覚ひず落涙仕候斯く御親母の心を憂たためいかで是れを

孝と云ふべき」。故郷の母親の涙は、都会で墮落した生活を送る少年に対して、一番の戒めとなるのである。上京者として、近代的な価値観を手に入れてしまった少年たちは、二度と共同体の一員に同化する事はできない。彼らにとつて、生まれ育った土地は、隔たった所から懐かしむことしかできない場所であり、失われたもの故に理想化され、心情を投影する場として再生産されていくのである。

「故郷を懐ふ」（太田稔三／三一〇、九七年九月一五日、八六〜八七頁）のように、都会生活の孤独や淋しさからくる望郷の念を記す作文も多い。「花の都」は、困苦にあつても「誰一人余を憐むものなく、余を慰むる者となし」の「心細き」所であり、それゆえに「さるにても恋しきは故郷の父母なり、嗚呼慕はしきは余が愛する故郷の山川なり」と、故郷は筆者の中で美化されていく。「上京する友に送る文」

（二宮静／四一七、九八年三月一五日、八七〜八八頁）は、この種の投稿としては珍しく、在京者の立場から、同輩への書簡という体裁をとる。東京の友人たちは「或は誇大の言を吐き、或は浮華に流れ或は因循姑息」な者はかりであつて、「共に胸襟を開きて談論すべき友」はいない、と孤独が吐露され、友人を迎える喜び「暗夜に灯火を得たる心地」への表明に繋つていく。さらに心労にふれた例も少なくない。例えば、懸賞文の課題として出題された「友人の病気を其父兄に報ずる文」（三一四〜一五／九七年七月一日〜一五日）には、「病氣」として、肺病や脚氣のほか、脳病、脳充血などが取りあげられている。

病の直接の原因は「非常の御勉強」と記述されるが、「勉強」と「病」を結ぶ文脈の背後には、都会生活での精神的な疲労が見えかくれする。

上京者たちが、東京から遠く隔たった場所として、〈故郷〉を理想化したことと並んで、投稿欄を賑わせたのが、地方少年たちによる〈田舎〉発見の作文であつた。「田舎の快樂」（藤本学／一〜二、九五年六月一五日、六〇頁）、「田舎の美愛すべし」（原良造／二一四、九六年二月一五日、八九頁）などと題されたそれらは、「人間生活の快樂 夫都会に在る乎 特た田舎に在る乎」と問ひかけ、都会の「学校」「美術館」「博物館」「電気」「瓦斯燈」などの文明と、田舎の「清空」「軽風」「桜花」など「山紫水明」なる自然とを比較し、後者に軍配をあげる（「田舎の快樂」という型を共有している。さらに、「都会の繁華は（中略）美観のみ是外観のみ裡面人情の軽薄風俗の衰頹実と言ふに忍びざるものあり」と批判し、「我が田舎の人情風俗を見るに実朴にして孝悌忠信の道を守り徳義礼讓又並高し」のように田舎の美俗を賞揚して、「天然の一大樂園」と位置付ける（「田舎の美愛すべし」）ものや、秀吉や義経をはじめ、ナポレオンやワシントン、釈迦などの「英雄豪傑」を例にあげながら、田舎の自然こそが「土氣を養ふ」として、「氣概ある者は直しく都門を脱して寒村僻地の田舎に来れ」と呼びかけるもの（山田実治「田舎俊傑を生ず」／二一三二、九六年一月一五日、八二頁）のように、号を追うにつれて、その論調は自然から人情、人物の比較へと拡大していく。

ともあれ、以上のように、地方少年たちが見出したのもまた、風光明媚な田舎の自然と人情であつた。彼らが表現した田舎もまた、近代

的な価値観から逆照射された、ユートピアとしての地方に過ぎない。むしろ「田舎豪傑を生ず」の論調に明らかのように、立身出世への夢は、逆にこうした地方者の視点に立つことでより直截に表現され、その向こうには、都会への憧れがかくされている。上京者と地方者、両者のベクトルはどちらも一見、都会から地方へ向かっているように見えるが、彼らの中で強く意識されているのは間違いなく東京であり、表裏一体の関係にある両者は、相互に補完しあいながら、東京と地方のイメージを形作り、立身出世主義を支えていったように思われる。なお、都会の少年が休暇を使って、幼い頃訪れた沼津の叔父のもとを再訪し、変わらない景色に感動する「かすてらとい、景色」（枯林生／五一六、九九年三月一日、二五―二八頁）や、東京の華族女学校と故郷である水口の運動会とを紹介した小波の參觀記「都鄙二色の運動会」（五一―二四、同年一月一日、八八―九四頁）等、この時期の「少年世界」には、この他にも、地方という視点を積極的に導入した記事や企画が目立つ。第五卷（九九年）からは、「日本全国各地方に、古から語り伝へられて居る、口碑伝説の面白いものを、小波一々書き直して、本誌上に紹介する」企画（明治三十二年の少年世界）四―二七、九八年二月一日、広告三頁）「諸国お伽噺」も開始されている。個々の記事や企画に関しては、別途検討が必要になると思われるが、新たな地方へのまなざしが形成されつつあった一例として付言しておく。

（四）

一八九九（明治32）年八月、「少年世界」は投稿欄を通じて、読者に「将来の目的」を尋ねている（「少年演壇／注意」五一―一八、九九頁）。次号からほぼ毎号、「新案端書便」と銘打って紹介された投稿には、軍人を筆頭に、実業家、政治家、学者などが並び、少年たちの夢のありかを知ることが出来る。立身出世の到達点まで、彼らの前にはまだまだ長い時間が横たわっていた。投稿作文「学友の帰省するを送る序」（水谷美津彦／二―一七、九六年九月一日、八七―八八頁）の筆者もまた、「将来」にふれて次のように述べている。

独り期せ故郷に着けて帰らん衣は錦ならざるべからず最も大なる快樂は尚遙かに将来に存するなり希くは君学を途に棄てず復つひ上京の期を誤る莫からんことを聊か記して君を送る

「将来」は「尚遙かに」遠い先のこととして意識され、「最も大なる快樂」はその時まで保留される。学問で立身するためには、学校制度の階梯を一つずつ昇っていくしかない。上京は立身への第一歩に過ぎないのである。先述したように、遊学をめぐる物語は、東京までの距離を繰り返し描いた。それらはまた、少年たちの前に広がった、将来までの時間的距離の暗喩であったと言えるかも知れない。

こうした時間的距離の自覚は、一方で、〈少年〉という時間、すなわち近代的な少年期の輪郭を明瞭にするだろう。「少年世界」は、

博士や軍人の肖像を掲げた口絵や、英雄伝・偉人伝といった読物を通して、少年たちに目標とすべき「将来」の姿を提示すると同時に、少年たちに与えられた「今」という時間の過ごし方を提案する。それは例えば、「帰省」の快樂であり、「運動」の壯快であり、投稿を通じて記者や未知の少年たちと親交を結ぶ愉快であろう。上京遊学を題材にした作品においても、「落花一片」の雪野と桜木、「銀行の小童」の国野と佐々木、「逆旅」の川嶋と山谷といった登場人物を通して、少年たちの友情や絆が強調される。苦学の辛さや、都会での孤独を共有できる存在として、同じ時間を生きる者として少年が、境遇や立場の違いを超えて選択されるのである。

諸雑誌の整理、統合により生まれた「少年世界」は、「中学世界」(一八九八年八月創刊)や「幼年世界」(一九〇〇年一月創刊)の登場によって、その性格や位置付けを明確にしていく。ようやく姿を現したかに見える(少年)という時間は、以後、どのような変化を見せるのだろうか。また、一八九八(明治31)年、東京では奠都三〇年祭が挙行されている。地方少年たちが抱く東京のイメージも、当然ながら時間とともに変容していくに違いない。さらに、今回は部分的にかふれることができなかつたが、学問とならぶ少年たちのもう一つの立身の間として、実業の世界がある。⁽¹⁷⁾日清戦争後、にわかに脚光を浴びていくこの実業をめぐる物語についても、上京遊学物との関連を含めて、検討が必要になるだろう。今後の課題としたい。(引用文の旧字は原則として新字に改めた。ルビは特殊な読みを示すもののみが付

し、傍点や圏点は省略した。)

注

- (1) 続橋達雄「児童文学の誕生―明治の幼年雑誌を中心に―」桜楓社一九七二年一〇月、一九二―一九三頁
- (2) 菅忠道「明治期の児童雑誌」『文学』第二四卷第一二号、一九五六年二月、一一八頁
- (3) 続橋達雄 前掲書、一九四頁。「期待感」の象徴として続橋が指摘する「第二の維新」という用語については、第一卷第二号(一八九五年一月一五日、一―二頁)の巻頭論説に詳しい。
- (4) 「少年世界」については、名著普及会発行の復刻版(一九九〇年四月―九一年四月発行)をテキストとして使用した。
- (5) 「少年園」「小国民」など明治二〇年代前半期の雑誌に発表された遊学物については、拙稿「もうひとつの(東京遊学案内)―明治二〇年代の幼年雑誌に描かれた遊学少年たち―」(『児童文学研究』第二九号、一九九六年一月、一―二二頁)を参照されたい。
- (6) 「日本博士鑑」は、第三卷第二号より第二五号まで計一一回掲載された。その後も「続日本博士鑑」「新博士鑑」などの名で、同種の企画が断続的に続いている。
- (7) この他、「貧少年(峨飛徳將軍の少年時代)」「森田思軒閣、井上承風軒訳/第三卷第一号―第九号、一八九七年一月一日―四月一日/」立志伝―のち井上「編」から「訳」に変更あり)などの偉人伝・英雄伝においても、被伝者の「苦学」を強調する場合が多い。
- (8) 竹内洋「立志・苦学・出世―受験生の社会史」講談社現代新書、一九九二年二月、一三八―一三九頁
- (9) 編集方針の変化にとまかない、投稿を扱う欄名も「奇書」「少年詞藻」「少年演壇」と移り変わる。本稿では便宜上、「投稿欄」で統一した。

- (10) 高山に賛同の意を表した投稿としては、本文中に引用した岡野、今井のほか、「我憂苦の経歴を叙して諸君に望む」(松本惣吉／第二巻第八号、一八九六年四月二十五日、八五頁)等がある。
- (11) 成田龍一は、読者―読書行為―読書空間という観点から「少年世界」の諸記事を分析した論文のなかで、読書行為や投書を通じた少年たちの「われわれ」意識によって、「読者共同体」(R・シャルチエ)が形成されていく過程を論じている。(『少年世界』と読書する少年たち―一九〇〇年前後、都市空間のなかの共同性と差異―)『思想』八四五号、一九九四年十一月、二〇九―二一〇頁)
- (12) 木村小舟「遊学少年の行方」『明治少年文化史話』童話春秋社、一九九四年五月、五三―五七頁(のち『明治少年文学史 第四巻』として復刻。大空社、一九九五年二月)
- (13) 松村友視「(中)と(地方)のはざま―明治文学を視座として」『日本文学史を読むⅤ 近代Ⅰ』有精堂、一九九二年六月、一〇―一二頁
- (14) 作文以外にも、(7)に挙げた「貧少年(峨飛徳將軍の少年時代)」をはじめ、「華盛頓の生立」(桜井鷗村／第五巻第三号、一八九九年一月一日、六二―七一頁)「立志談」などの偉人伝・英雄伝において、被伝者の田舎での幼年時代を強調する傾向が見られる。
- (15) 頻繁に取り上げられる運動の一つに「競漕」がある。例えば「墨江の競漕」(江湖山人／第五巻第八号、一八九九年四月一日、八五―九〇頁)「運動世界」欄、口絵「墨江の端艇競漕」および「墨陀の三大競漕」(悠々子／第五巻第一〇号、同年五月一日、九五―一〇一頁)「運動世界」欄など。
- (16) 田嶋一は「少年世界」の変遷を手がかりに、近代的な少年概念の誕生を考察した論考のなかで、現在の「少年」概念は、ほぼ一九一〇年前後に確立されたと指摘している。(『少年世界』と明治中期の少年たち(3))『名著サプリメント』第三巻第五号、一九九〇年四月、四―
- (17) 例えば、「時事」欄掲載の論説「小学卒業生に望む」(無署名／第四巻第八号、一八九八年四月一日、一〇一頁)では、小学生徒の卒業後の進路として、「尚進んで学の淵奥を研鑽せんとする者、及び身を実業界に委ぬる者の二方向」が示される。
- (18) 一八九七(明治30)年には雑誌「実業之日本」が創刊されるなど、日清戦争を機に、実業に対する関心が高まっていく。この「実業ブーム」については、E. H. キンモンスの分析がある。(『立身出世の社会史―サムライからサラリーマンへ』玉川大学出版部、一九九五年一月、一四六―一五八頁)

〈付記〉

本稿は日本児童文学学会第三〇回中部例会(一九九七年三月一日・於中京大学)での口頭発表をもとに、加筆、修正を施したものである。